

Contents *****

特集：ソウルで体感した朝鮮半島情勢	1p
＜今週の”The Economist”誌から＞	
”Keeping hope alight” 「朝鮮半島異常なし」	7p
＜From the Editor＞ 近頃ソウルで流行るもの	8p

特集：ソウルで体感した朝鮮半島情勢

今週は18日から20日にかけて、文在寅大統領が平壤を訪問しました。韓国大統領としては金大中、盧武鉉に続く3度目の訪朝となりますが、これは今年3度目の南北首脳会談でもあります。ここへきて朝鮮半島情勢の変化はまことに急であります。

たまたま筆者は先週ソウルに出張し、第12回目の日韓戦略協力対話に出席してきました。韓国の国立外交研究学院（KNDA）と日本の平和・安全保障研究所（RIPS＝西原正理事長）のが毎年秋に行っている会議で、今回は3回目の参加でありました。

本号では、ソウルで体感した朝鮮半島情勢に関する私的見解を報告してみます。

● 「3-2-1-0」から「4-3-2-0」へ？

「今は3-2-1-0だが、もうじき4-3-2-0になるかもしれない」——これが何を言っているかお分かりだろうか。答えは以下の通り。

○対北朝鮮の首脳会談

	首脳会談の回数	今後の展開
中国： 習近平国家主席	米朝首脳会談の前に2回（3月/北京、5月/大連）、後で1回（6月/北京）、合計 3回	9月9日の北朝鮮建国70周年には栗戦書常務委員を派遣。ただし近々、習主席による公式訪問の可能性も。
韓国： 文在寅大統領	南北首脳会談を板門店で 2回	今週、文大統領が平壤を訪れて 3回 <u>目の会談</u> を実施
米国： トランプ大統領	6月12日に歴史的な米朝首脳会談をシンガポールで。 1回	北朝鮮側が2度目の首脳会談を文書で要請。 <u>米側が日程を調整中</u>
日本： 安倍首相	なし= 0回	日朝首脳会談を探るべく、7月にベトナムで接触との報道あり

日本としては、「ほら、お宅だけが乗り遅れているよ」と言われているようで、焦りを感じるころかもしれない。もちろん日本の首相が、金正恩委員長と急いで会う必然性は乏しいのである。それでも、今年になってからの北朝鮮外交のペースがいかに速いかが、日本国内に居るとわかりにくくなっているのではないだろうか。

そしてこの間に、米中韓3か国の対北朝鮮関係はそれぞれ劇的に変化しつつある。

1. 中国は既に対北朝鮮関係を好転させている。かつての冊封体制を復活させたかのよう
に、相手国の指導者を3回続けて呼びつけ、逆に政府専用機を貸し与えるという
厚遇ぶりを示している。国境地帯における「経済制裁破り」も黙認している模様。
➤ 中国側からすれば、長年の頭痛の種であった北朝鮮が擦り寄ってきて、緩衝地
帯（バッファ）として位置付けるという本来の目標を取り戻したことに満足
している。逆に北朝鮮側は、中国に「取り入る」ことで後顧の憂いをなくした。
中朝はともに対米関係を睨みつつ、したたかに相手を利用している形。
2. 米国ではトランプ大統領が、米朝首脳会談の成果をアピールしつつ、金正恩委員長
への信頼を強調している。2度目の首脳会談要請に対しても前向きである。
➤ ただしポンペオ國務長官以下の担当者たちは、北朝鮮の言動を額面通りには信
用しておらず、非核化の実務は停滞している。
➤ 9月5日に、匿名政府高官がニューヨークタイムズ紙に暴露したように、政権
内には大統領が間違った政策を遂行することを防ごうとしている「大人たち」
がいる。こうしたトランプ政権の「二重構造」は、最近の危なっかしい米国外
交を紙一重で救っているけれども、透明性を低下させてもいる。
3. 韓国では文在寅大統領が、やや前のめり気味に対北外交に取り組んでいる。今週は
韓国大統領として3人目の訪朝を果たした。
➤ 5月には8割を超えていた文在寅政権の支持率は、ここへ来て5割を割り込む
ほど悪化している。公約通り最低賃金を「2年間で3割」も上げたところ、案
の定、経済の現場が混乱している¹。平壤行きは、ナショナリズムを喚起して人
気回復を、との狙いがありそうだ。しかし韓国政治の動きの速さから考えると、
再び民意が戻ってくるとは考えにくいのではないか。
➤ 今週の”The Economist”誌がこの間の事情を冷やかに描いているので、本号の
p7に抄訳を掲載しておいた。同記事のポイントは、「韓国国内に、増税を受け
入れてでも南北統一を」という機運がほとんど存在しないこと。北朝鮮経済の
建設資金をどこから得るのか、という目途がついていない。

¹ 日本の最低賃金は都道府県別になっているが、韓国のそれは全国一律である。地域対立の激しいお国柄ではそれができないのだそうだ。

●日朝関係の思考実験をしてみると…

かくして今週で「3-2-1-0」は「3-3-1-0」に進化した。とはいえ、それで日本国内が焦りを感じているかといえば、答えはノーであろう。いくら金正恩の外交的な露出が増えたからと言って、それで「北朝鮮が変わった」と信じる人はほとんど見当たらない。

逆に韓国側には、一足飛びに北朝鮮の経済建設にジャパンマネーを期待する向きがある。しかるに日本側としては、「馬鹿も休み休み言ってほしい」ということになる。なにしろ北朝鮮の非核化はまだ始まっていないし、日朝間には拉致問題も横たわっている。なおかつ、国連制裁が解除されたわけでもないのである。

それでも以下の説明が難しいところなのであるが、北朝鮮が完全に非核化し、拉致問題にも納得のゆくような解決が得られるのであれば、いつかは「日朝国交正常化を」という日が来るだろう。その場合は1965年の日韓基本条約において、韓国向けに無償3億ドル、有償2億ドル（円借款）の資金協力をしたときと同等の措置が取られるべきであろう²。そうなったときに、日本国内の反論はあまり多くないのではないかと思うのである。

2002年9月17日の平壤宣言では、以下のように具体的に書かれている³。

双方は、日本側が朝鮮民主主義人民共和国側に対して、国交正常化の後、双方が適切と考える期間にわたり、無償資金協力、低金利の長期借款供与及び国際機関を通じた人道主義的支援等の経済協力を実施し、また、民間経済活動を支援する見地から国際協力銀行等による融資、信用供与等が実施されることが、この宣言の精神に合致すると基本認識の下、国交正常化交渉において、経済協力の具体的な規模と内容を誠実に協議することとした。

その後、北朝鮮側は「ミサイル発射のモラトリアムを2003年以降もさらに延長していく」という上記の宣言を破っているから、あんなものは死文化している、と言い張ることもできよう。とはいえ、金正日委員長がサインした同文書は、北朝鮮側はけっして無視できないはずである（もちろんその息子である金正恩も！）。

1960年代の対韓円借款は、鉄道設備改良事業、浦項製鉄所の建設、さらには医療、教育、上下水道などのインフラ投資にも使われ、韓国経済の建設に資することになった。同様なことが北朝鮮に対して行われる可能性も、いずれは検討の必要が生じることだろう。

ちなみに戦後賠償を考える際には、「対韓国モデル」よりも「対中国モデル」（対中円借款方式）の方が適している、との指摘もある。これは荒木光弥・国際開発ジャーナル主幹が言っていることで、北朝鮮は中国の後ろ盾を必要としているし、同じ政治体制（一党独裁）であるし、中朝国境の向こう側には朝鮮族が多く住んでいるから、と言う⁴。つまり北朝鮮は、「韓国よりも中国の成功を見習う方が賢明だ」というわけである。

² 円借款なのにドル建て表示になっているのは、1960年代の円はまだ国際的な信用がなかったからであろう。当時の日本の国力から言えば、5億ドルは非常に踏み込んだ規模の経済協力であった。

³ https://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/s_koi/n_korea_02/sengen.html

⁴ 『国際開発ジャーナル』9月号「羅針盤」から

●短命な大統領を生み出す韓国サイクル

韓国政治の変化はまことに早い。2016年10月に、筆者が初めてこの日韓戦略協力対話に出席した時は、まだ朴槿恵政権であった。会議が終わってソウルから帰国したその日に、いわゆる「崔順実（チェ・スンシル）ゲート」が炸裂した。韓国国民の怒りはまことに深く、「100万人のキャンドルデモ」が連日のように行われることになる。

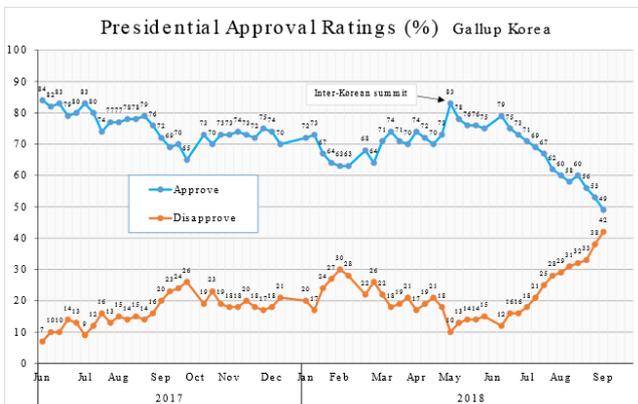
そのことが大統領弾劾につながり、選挙日程の前倒しから文在寅政権発足に至るわけだが、正直言って理解に苦しむ部分もあった。なぜ、あの事件が政権崩壊にまで発展するのか。そしてまた歴代の韓国大統領は、どうして退任後は石もて追われるのか。

筆者なりの解釈では、韓国政治を理解するひとつの鍵は「民主主義」への過剰なまでの思い入れではないかと思う。韓国は戦後の独裁政権を、民主化運動を通して正常化してきた、という自負がある。それゆえ「腐敗した政権を民衆の力で倒す」ことがしばしば絶対的な正義とされる。そのために、「熱狂的に選んだ大統領を、すぐまた熱狂的に引き摺り下ろす」というサイクルが起きやすい。崔順実ゲートの際にも、「あんな大統領を選んだことが恥ずかしい！」という有権者の思いが、朴槿恵降ろしにつながったのである。

しかしこんなことを繰り返していると、安定政権は望み薄である。任期が5年で再選を認めない今のシステムでは、大統領が3年目を過ぎた頃からレイムダック化が始まってしまふ。現在の文在寅大統領は、盧武鉉政権の大統領秘書室長など側近として働いたことでそのことを学習した。すなわち「政権末期になってから、南北首脳会談をしても手遅れ」なのである。対北朝鮮関係を改善するためには、当然ある程度の時間が必要になる。だから大統領は、なるべく日が浅いうちに金正恩に会わなければならないのである。

文在寅大統領は、運よく任期1年目の今年4月27日に板門店での南北首脳会談にこぎつけることができた。しかし政権支持率は、既にこの夏から下落を始めている。有権者は既に「南北ゲーム」に飽きて、今は「経済の改善」を求めているのではないだろうか。

○文在寅大統領の支持率



●北朝鮮の金正恩側にも「焦り」が…

そんなわけで、藁をもつかむ思いで平壤に飛んだ文在寅大統領を、金正恩委員長は意外なほどの厚遇でもてなした。共同会見では文在寅大統領に見せ場を与え、「聖地」白頭山にも一緒に登った。これは現役の韓国大統領としては初めてのことだそうである。

本来であれば、「核は米朝間の議題」であるから、韓国には一切触れさせないと突っぱねても不思議はなかった。そこを敢えて、米朝の橋渡し役を文在寅大統領に託すのだから、「らしくない」くらいのサービスである。実は北朝鮮側にも、一種の「焦り」があるのではないだろうか。

「6・12」シンガポール会談は、終わった当時は「北朝鮮を甘やかした合意」であるとして、“**Kim Jong Won**”（金正恩の勝ち）などと非難されたものだ⁵。しかしあれから3か月が過ぎても、米国側は何も動かない。その間に北朝鮮側は、「核実験場の廃棄」などの小さな譲歩を小出しにしている。本来ならば9月9日の建国70周年までに、「米国からこれを得た」と国内向けに喧伝できる材料が欲しかったはずである。

今回、発出された平壤共同宣言でも、北朝鮮は「寧辺（ニョンビョン）の核施設廃棄」などの新たな材料を提示している。その心は、「米国よ、頼むから何か反応してくれ。そうでないと国民の手前もあって、これ以上、ベタ降りを続けるわけにはいかない」であろう。独裁者とは、常に偉そうにしていなければならない辛い立場なのである。

ところがトランプ大統領は、たびたび金正恩を褒めるツイートをしてくれる程度で、何か具体的な譲歩をしてくれるわけではない。困ったことに北朝鮮側としては、今さら核実験やミサイル発射という「恫喝外交」に戻ることもできないのである。

本誌6月22日号でも述べたことだが、米朝間の合意には根本的な時間軸のズレがある。トランプ大統領は2020年、最長でも2024年にはその地位を去る。次の瞬間には、民主党政権が誕生するだろう。そうなれば次期政権は、パリ協定への復帰と対イラン核合意の復活を宣言するだろう。逆に対北朝鮮外交に対しては逆風を吹かせるはずである。トランプ路線はどんどん否定されていくはずなのだ。

北朝鮮側は、それを百も承知でトランプ大統領に賭けた。だから対米交渉は、トランプ政権の最中に前進させなければならない。

あいにくなことに、金正恩氏はまだ30代である。今後あと数十年は国を背負っていかなければならない立場だ。任期があと5年程度であれば、今まで通りの瀬戸際政策を続けることも可能であった。しかし10年以上となれば、国内経済を放置しておくわけにはいかない。だからこそ、「非核化と経済協力のディール」を目指しているのであろう。その際にいちばん困るのは、「周囲の大国から無視されてしまうこと」である。

⁵ 翌週のThe Economist誌のカバーストーリーのタイトル。本誌6月22日号で紹介済み。

●2度目の米朝会談はいつ、どこで？

3度目の南北首脳会談を終えた文在寅大統領は、来週にはワシントンへ乗り込む。トランプ大統領に会議の内容を伝え、早く2度目の米朝会談を、と催促するだろう。

ただしトランプ大統領も多忙な身の上である。なにしろ来週25日に予定されている日米首脳会談では、「4回目の日米ゴルフ」の日程が入らなかった⁶。実際、11月6日に中間選挙を控えて、遊んでいるところを支持者に見られたくはないだろう。

ただしトランプ大統領が、みずからアジアへ外遊するチャンスは当分ないだろう。11月に予定されているAPEC首脳会議（ポートモレスビー）や東アジアサミット（シンガポール）も、ペンス副大統領が代理出席することになっている。おそらくトランプ大統領が、次にアジアを訪れるのは来年6月の大阪G20サミットまで待たねばならない。

それでは金正恩委員長みずからが、訪米して世界に向けて朝鮮半島の非核化をアピールしてはどうか。国連総会の一般討論演説は、今年は9月25日から行われる。193の国連加盟国の代表は15分間、発言する機会が与えられている。今年のテーマは「全ての人に関わりある国連を目指して」であり、安倍首相もその権利を行使する予定である。

仮に金正恩が国連会場に姿を表して、「朝鮮半島の戦争状態を終わらせたい」と英語で一席ぶったらどうなるだろうか。それこそ一夜にして、国際世論がガラリと変わってしまうかもしれない。少々考え過ぎかもしれないが、筆者がソウルで垣間見た「悪夢」として聞き流しておいていただきたい。

○イベントが多い今後の政治日程

- ・ 3回目の南北首脳会談（平壤、9/18-20）
- ・ 自民党総裁選挙（9/20）
- ・ 第2回日米通商協議＝FFR（ニューヨーク、9月下旬）
- ・ 対中第3次制裁追加関税2000億ドルを実施（9/24）
- ・ 米韓首脳会談（ワシントン、9/24）
- ・ 安倍首相、国連総会で一般討論演説、日米首脳会談？（ニューヨーク、9/25）
 - ▶ 4度目の「日米ゴルフ」は成立せず
- ・ FOMC（9/25-26）→今年3度目の利上げへ
- ・ 米中閣僚級協議（ワシントン、9/27-28）？
- ・ 金正恩委員長が訪米（ニューヨーク、9月末）？
- ・ 沖縄県知事選挙（9/30）
- ・ 内閣改造、党役員人事（10/1）
- ・ EU定例首脳会議（10/18）→Brexit交渉間に合わず？11月に臨時首脳会議？
- ・ 安倍首相が訪中（10/23）→日中平和友好条約40周年記念式典
- ・ 臨時国会召集（10/26頃）→災害復旧の補正予算が急務
- ・ 米中間選挙（11/6）

⁶ 一部報道によれば、9月24日、ニュージャージー州ベッドミンスターズのトランプ・ナショナル・ゴルフクラブに予約が入っていたらしい。

<今週の”The Economist”誌から>

”Keeping hope alight”

「朝鮮半島異常なし」

Asia

September 13th, 2018

***3度目の南北首脳会談に賭ける文在寅大統領、それを迎える金正恩委員長。お互いに必死なことは分かりますが、どこか無理をしているように感じられます。**

<抄訳>

この1か月、平壤劇場は多忙である。9月9日には建国70周年をパレードで祝った。マスゲームの準備も始まった。9月18日には韓国大統領が10年ぶり以上の平壤訪問となる。

しかし3度目の会談に賭けているのは、金正恩よりも文在寅の方だ。最低賃金を上げたことで韓国景気は失速。訪朝は人気回復のチャンスであり、首脳会談が朝鮮半島での核外交を再生させることを望んでいる。2度目の米朝首脳会談の準備も進んでいるようだ。

今回の会談の主目的は南北関係の強化となろう。双方は軍事的緊張の緩和を望み、DMZの兵員縮小などが語られよう。両首脳はまた朝鮮戦争の終戦合意に意欲を見せている。

文在寅はさらに「新経済地図」に言及している。南北の道路や鉄道を修復し、パイプラインでロシアのガスを南へ供給する。北への観光旅行再開も目指す。2016年に閉鎖されたケソン工業地帯も再開し、韓国企業による北への投資再開の先駆けとしたい考えだ。

これは金正恩には結構な話だろう。国際的な経済制裁にもかかわらず、南北は経済協力の準備を始めている。7月には越境鉄道を共同で検査。今週の東方経済フォーラムでは、ガспロムがパイプラインを検討中と述べた。平壤訪問には財界人も同行するだろう。

あいにく北朝鮮が非核化で前進しない限り、制裁の緩和は考えにくい。中国は制裁破りを黙認しているが、韓国にはそんな度胸はない。対米関係を危うくしかねないからだ。

普通の韓国人は忍耐力を失いつつある。最初の南北会談の頃の期待は剥げ落ち、5月に83%を記録した大統領支持率は50%を割っている。まずは経済を何とかして欲しいのだ。

有権者が大統領の計画を知れば、人気はさらに落ちるだろう。新インフラ計画はすべて韓国側の負担となる。増税も受け入れるから南北統一を、などと言う人はほぼ居ない。

来週の会談で文在寅は対米核交渉の前進を促すだろう。しかし北は核実験場を閉鎖したことにトランプは戦争終結宣言で報いよ、シンガポールで約束したはずだと言うだろう。

文在寅も、次は北が核の在庫を手渡す番だと考えている。北が非核化すれば、米国は終戦宣言と制裁緩和に乗り出すだろう。韓国は「トランプ個人」に希望を賭けている。

トランプ自身は楽観的で、軍事パレードに核兵器がなかったことを多とし、「これぞポジティブな表示」とツイートし、米朝会談後も核建設が続いていることは気にしていない。

トランプ=金会談は、独裁者からの手紙に触発されたものだ。米外交官は今週も訪朝して協議している。たとえ北に非核化の意志がなくても、双方が万事良好の振りをするには意味がある。来週の平壤ではそれが明らかになろう。金正恩の演技力は相変わらずだ。

<From the Editor> 近頃ソウルで流行るもの

ソウルを訪れるのは2年ぶりで、前回の日韓戦略協力対話以来のことでした。

会議が終わって夕食会のこと。連れて行ってもらった料理店では焼肉が出ました。おっ、本場のプルコギ！それだけではなく、日本ではご禁制の品となってしまったユッケもあるじゃないですか。ごつつあんです！



それではこの宴会、どんなお酒が飛び出すのか、マッコリか、バクダン酒か、と身構えていたところ、なんと最初から最後までビールでありました。

ご同行の伊豆見元・東京国際大学教授によれば、最近の韓国におけるトレンドは「119」なんだそうです。すなわち「1次会だけ」、「お酒は1種類」、それで「午後9時にはお開き」なんだとか。昔のソウルでは、日韓双方が昼間の会議ではとことんやりあって、夜にはノミュニケーションで関係を回復していたという記憶があるのですが。

ちなみに「バクダン酒」というのはビールにウイスキーを混ぜたもので、普通に混ぜたのを原爆、ウイスキーにビールを注ぐのを水爆というのだそうです。筆者は幸いなことに体験したことはありません。

思えば中国でも、宴会の席で「白酒」（パイチュウ）が出なくなって久しいのです。世の中はどんどん変わっているのですね。今の時代、パイチュウやバクダン酒で深夜まで飲み明かしているのは、オヤジ世代の日本人駐在員だけかもしれません。

そういえば先月末に訪れた上海では、「タクシーはアプリで呼ぶもの」になっていて、その手の登録をしていない外国人客にはまことに不便なサービスになっておりました。ソウルのタクシー事情も多分にそれに近く、ホテルでタクシーを呼んでもなかなか来てくれません。しかも遠距離のお客は敬遠されてしまうのだそうです。

今どき手を上げればタクシーが止まってくれて、交通渋滞もひどくない東京はなんとありがたいのでしょうか。今週乗った運転手さんにこの話をしたら、「日本は個人タクシーが多いから、ハイテク化は無理だろうね」と即座に却下されてしまいました。

もうひとつ。仁川空港に隣接しているパラダイスシティ (<https://www.p-city.com/>) にも行ってきました。ここは韓国のパラダイスグループと日本のセガサミー社合弁による IR (複合型リゾート) 施設。日本からいちばん近い IR はどんなものか覗いてきました。

いきなり度肝を抜かれたのは、館内でふんだんに使われている現代アート。特に草間彌生の「かぼちゃ」は圧巻で、待ち合わせ場所として使われているようです。



同ホテルはちょうど今週末に第 2 期建設分がオープンするところ。ホテルあり、会議場あり、ショッピングセンターあり、アトラクション施設あり、その中にカジノがあって収益源となっている。筆者は今から約 20 年前に、ウォーカーヒルのカジノで遊んだ経験があるのですが、今の IR はそれとは全く別物と考えた方がよいようです。

日本でも先の通常国会で IR 実施法案が成立しました。これから日本でどんな複合型リゾートが誕生するのか。そして韓国やマカオやシンガポールとの競争に勝ち抜くことができるのか。その場合は、どこで比較優位を確保することができるのか。

ギャンブル依存症対策はもちろん重要ですが、日本版 IR にはほかにも数多くの論点がありそうです。

* 次号は 2018 年 10 月 5 日 (金) にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com